天德山龍泉院

住職　椎名宏雄老師

平成十六年

月例会

日宣

第七号

龍泉院參禪會

寒苦いまだ人をやぶらず道をやぶらず

『正法眼蔵』「行持」の巻の一節であります。道元禅師はこのお言葉に続いて、**ただ不修を恐べし**、不修とは修行しない、やらない、修めないということ。それを恐れなさい！　**不修それ人をやぶり道をやぶる**、こうおっしゃっておられます。やらないということが人をダメにするんだ、道をダメにするんだ！　確かにその通りであります。坐禅をして、寒さ暑さでダメになった人はまずいない。それを突き抜けてやろうという堅固な心、これが単なる寒さ暑さという環境をはね除ける力を持っているからだ！　こう思えるのであります。

例えば、私ども先日の歳末助け合い托鉢の日は物凄い北風の日でした。皆街行く人がオーバーを押さえながらやっと小走りに通り過ぎて行くような日でした。左手に持っている鉢が手に凍りつく、寒さを越えて感覚が無くなる。感覚がなくなってしまうと、もう何時の間にかそれが今度は暖かくなってくる気さえするんです。

ところが、声を張り上げてお経を読んで半日終わって、その爽快なこと！　これは筆舌に尽くし難いものがございます。やらない人にはわからない、「**寒苦いまだ人をやぶらず道をやぶらず**」であります。

今日は寒いからよそう。こういうやらないことが、**人をやぶり道をやぶる**のであります。

道元禅師も恐らく骨身にしみる寒さを味わったからこそ、こういうお言葉を述べられたのでありましょう。本当の寒いところに行けば、今日みたいな寒さはなんていうことはありません。

寒いからこそ、むしろ行になるんであります。ありがたいんだと思えば、**寒さこれ我が友**であります。寒中一時の坐！　ありがたい坐をドッシリ坐りこもうではありませんか！

「**寒苦いまだ人をやぶらず道をやぶらず**」

平成十六年一月二十五日　合掌

学道の人 身心を放下して ひたすら仏法に入るべし

『正法眼蔵随聞記』の中の一節であります。「学道」、いうまでもなく仏道を学ぶ。仏道を学ぼうとする者は「身心を放下」する。

「放下」、これは放り投げることではないんです。「放下」は置くこと、下すことであります。ですから「身心」を、ここに置いてしまう！ 身体と心が一人一人の全てであります。

その身体も心も、この本堂に置いてしまう！ 他へ持っていかない！ 他に遊ばせない！ ここへ置き去りにする！ これが「放下」することであります。

そして「ひたすら仏法に入る」。「ひたすら」ということが出来ない。頭の中にいろんなことが沸き起こります。考えるということは、それを追いかけることです。それをドンドン追いかけて行くはたらきが、考えるということです。ですから頭の中にいろんなことが浮かんでくることは、生きている証拠でありますから、良いことでも悪いことでもない、煩悩ともいえない。

それを追い回すのがいけない！ 普段の生活はそれを追い回すばかり。坐禅の時はこれがいけない！ それを追いまわさないで、引きずられないで、考えを止める！ そして「身心」はドッシリこの畳の上に置いて、本来の己に帰ることであります。普段は本来の己が置き去りになってしまっている。方々に飛び散っちゃっている。そういうはたらきを一切止めて、本来の己を本来の己のあるべきところに在らしめる。

これが坐禅であります。坐禅はそのための行、いや行以前の人間の根源的なあり方、有り様、それに帰ることであります。普段忘れ去っているものを全部引寄せる。全部引寄せてここにドッシリと安住する。そういうはたらきが坐禅であります！

ですから「学道の人 身心を放下してひたすら仏法に入るべし」といわれる所以であります。

平成十六年二月二十二日　合掌

発心とは
はじめて自未得度先度他の心をおこすなり

私たちはよく「**発心**」ということを申します。道を求める心を、切々と起すことであります。ところが「**発心**」という言葉は安易に使われています。道心を起し、道を求めるという心を起すのは並大抵のことではない。初発心といって、初めて「**発心**」する！その心は大変素晴らしいんだ！ それこそお悟りの心であると道元禅師はおっしゃいますが、やがてその初発心の心を忘れ去ってしまう。これが悲しいかな普通の者の有様であります。

『道元禅師』は特に初めて起すところの「**発心**」について、それは「**自未得度先度他の心をおこす**」ことである！ と大変懇切でもあり重大なことを『正法眼蔵』「発菩提心」の巻でお説きになっております。「**自未得度先度他**」というのは、**自分はどうでもいい！ その前に人様を救う！ 人様が先に道を得られるようにする！** 考えてみればこれは破天荒のことであります。自分がまだ仏道に至っていないのに、どうして人様を救えるか、というのが我々の貧しい常識であります。ところがそれを吹き飛ばすような「**自未得度先度他**」、これでなくてはいけない！ これが「**発心**」というものだ！

それはどういう意味かといいますと、自分が道を求めるんだ、悟るんだ、心を落ち着かせるんだ、ショッチュウ何かに振り回される心をコントロールするんだ、そんな心を全部止めちゃうことです！ 所詮それは妄想煩悩の心、これを全部止めちゃう。どうせ起すんなら、人の為に坐るんだ！ 人様の為に自分の心を捧げるんだ！ その位の気持ちになりなさい！ そうすれば自分のチッポケな心は吹き飛んでしまう。誠に豪快であります。大らかであります。その位の気持ちで初心の人も、古参の人も共に坐る！ これこそ本当の「**発心**」である！ チッポケな望みや願いで坐るんでない！ もっと大きな坐りをしょうではないか！

「**発心とははじめて自未得度先度他の心をおこすなり**」

平成十六年三月二十八日　合掌

一念纔かに瞥起すれば
萬像其の前に堆し

『良寛詩集』の中の二句であります。「一念」というのは心の動き、つまり迷いであります。心の動きによる考え、考えがチラット浮かんで迷いが起こったならば、「**萬像其の前に堆し**」。あらゆる物事や考え方が次から次ぎへと起こってくる、手が付けられなくなる。だから「一念」が起こらなければいいんです！　ところが人間誰しもいろんな考えが浮かんでくる。「一念」をどう処理するか！　これが問題であります。要するに、それをドンドンつのらせて考えを凝らしていかないこと、追いかけないこと！　そうすれば「**一念**」が止んで明鏡止水に戻る。明鏡止水が本来の心であります。良寛さんはこの二句の前に「**心水何ぞ澄々たる之れを望めども端を見ず**」とおっしゃっております。人の心というものは何と澄みきっていることか、どこを眺め渡しても何処までも果てしない綺麗な素晴らしい波風立たない水面のようなのが人間の心である。本来そうであるんだが、そこに「**一念纔かに瞥起すると、萬像が其の前に堆くなってしまう**」こう読んでおられます。だから、坐禅は私どもの澄み切っている心に戻ることであります。何の為かんの為という目的のために行う坐禅ではない！　本来の自分に帰る、本来の澄み切った心に戻る！　それは正しい坐り方をして、正しい呼吸を行って、正しい姿勢で淡々と坐っていれば自然にそうなる。無所得無所悟の坐禅！　やれ自分は落ち着きがない人間だから坐禅でもすれば落ち着くか、なんていう動機で始めたり、煩わしいことばかりあるから坐禅でもして其処から少しでも逃げようか、ともに邪道であります。普段騒々しい中に身を置いている、そして自分を忘れている、本来の素晴らしい澄み切った心を忘れている！　その澄み切った心に戻るのが坐禅であります。無所得無所悟によってそれが得られる！　良寛さんは難しい言葉を使わないで「**一念纔かに瞥起すれば萬像其の前に堆し**」だから、そうならんように努めようと。ため坐禅を廃し本来の澄み切った心に戻りたいものであります。

平成十六年四月二十五日　合掌

人試みに意根を坐断せよ
十に八九は忽然として
見道することを得ん

道元禅師の『学道用心集』のお示しであります。「**学道用心集**」は道を学ぶもののいちばん肝心要の教え。「**人試みに意根を坐断せよ**」意識の起こってくる根本を断ち切ってしまいなさい！　意識は要するに、はからいや思いであります。そういうものを止めなさい。根本から切っちゃいなさい！　そうでないと学道は成り立ちませんよ、というのであります。幾ら坐禅を永くやっても、「意根」を凝らしていては駄目、はからいの坐禅をしていたのでは駄目、無所得無所悟の坐禅、悟りを求めない、得るところのない坐禅だ！　これは道理でわかっている。その道理も止めなさい。

いま頭の中をカラッポにすることだけじゃない。知っている道理も止めなさい！　こういうことであります。つまり人間的な考え方、これを全部とっぱらいなさい。そうしますと、どういうことになるか、自分自身の命にじかに触れてくる！　頭の働きをスッカラカンに止めてしまうと自分が己が、いま生きている、この生命体、生きている事実、そういうものにぶち当たる、ここのところであります。それを「**十に八九は忽然として見道することを得ん**」と言っておられるのであります。全部百パーセントとはいかないけれども八十・九十パーセントの人は必ず「**忽然として見道**」、道をみる、道を究めることができるぞ！　こういう証明をされているのであります。誠にありがたい教えであります。どんな人でも上智下愚を論ぜずでありますから、教養の有無、年齢の高低、性別、肩書も関係なし！　どんな方でも「**忽然として見道**」できる。そのためには「**意根を坐断**」することが大前提である！　人間的な頭を止める、それによって己の生命、命このいちばん根源的なところにズシンといきわたってくる。そういう命の真相を見極めること！これが禅の骨子であります。『道元禅師』はこのことを正に「**心身脱落**」とおっしゃっております！　誠にありがたい証明であります。

「**人試みに意根を坐断せよ十に八九は忽然として見道することを得ん**」　平成十六年五月二十三日　合掌

仏性かならず成仏と同参するなり

『正法眼蔵』「仏性」の巻の一節であります。本日ただいまより一夜接心開始です。例年参加されて慣れている人、初めての方、いろいろあると思いますが、坐禅の内容は同じでなくてはなりません。それは「**仏性かならず成仏と同参**」でなくてはならないのであります。道元禅師の仏性のお示しは、人間誰しも仏性を持っているのは駄目だ！　そういう仏性のとらえ方は、我が禅門仏祖の児孫ではない、そんな伝統はない！　仏性とは「**成仏と同参**」、仏になる行、只管打坐を正しく行う、熱心に行う！　このときにはじめて仏性がそなわる。これが「**成仏と同参**」という意味であります。成仏は仏になる、仏を成ずる、仏というものは仏像でもなければ、遠い二千五百年前のお釈迦さまでもない。他ならないここに坐っている我々である、皆さん方である。それをおいて仏なんて在りえない！　仏祖の正しく教えられた「行」を行ずることによってのみ、はじめて仏さんである、仏となることが出来る。その時に正しく仏性というものが具わる、こういうお示しであります。ですから、私共は仏道を行じていない時は凡人、仏道として「行」を行じている時には仏さんになる！　こうわきまえなくてはなりません。日頃の生活でも作務、炊事、仕事、それも仏道を行じているんだという心構えで行っている時には、仏性が同参している。とすればつまらない自分が動いているのではない、成仏としての働きが成されている。ですからベストの言動が取れる。只管打坐、坐禅をしている時に妄想を起こしているようでは生活三昧が成仏と言えない。基本は坐禅であります！

今日から明日にかけて七炷坐ります。大勢の方々のお陰で坐れるんであります。声は出さなくても大変な数の人々が皆様方に大きな期待を寄せております。その期待に応えるには「**成仏と同参すること**」！　ただこれだけであります。

「**仏性かならず成仏と同参するなり**」

平成十六年六月五日～六日「一夜接心」　合掌

参禅の人しばらく半途にして始めて得

『学道用心集』という書物の中の一節であります。「**参禅の人しばらく半途にして始めて得**」、「半途」というのは半分の道、我われは常に「半途」である。永いながい遥かなる仏道の中の半ばにも至っていないかも知れない、半ばを過ぎているかも知れない！　しかしそれはともかく、道を求めて歩いていることを「半途」と表現された。自分の足らなさ、至らなさを大いに感じ取って精進努力をおこたらない。こういう時こそ実ははじめて仏道に生きることが出来るんだ！　こういう深い意味をもって『道元禅師』は教えられているのであります。

とかく参禅経験の永い人、ベテランの人、そういった方々は惰性になりがちであります。ああ坐禅の時間はこのくらいだ。この辺りに力を入れてあとは惰性で流せばいい。なんていうことをあからさまに意識で考えなくても身体がそうなってしまうことがある。これが惰性であります。初心の人が何かわからないけど懸命に坐る。教えられた通り一生懸命坐る！　この方がはるかに本物である。十年十五年経っているベテランの人の坐禅より本物であります。ほかのことはともかく坐禅には年期はない！　一回一回が新たなる行である！フレッシュな実践であります。一回コッキリの坐！　これが我々の「只管打坐」であります。そして心構えとしては常に自分は至らないんだ！　こういうことをズシンと感じながら、だから努力精進するんだ！　こういう気持ちで坐って、努力する中で始めて仏道と親しくなる。仏道とはそういうものであります。宮崎奕保禅師さまが数え百四歳で毎日坐禅を続けられておられるお姿、自分が完成したなんていうお気持ちを毛頭お持ちでないからこそ出来るのであります！　それがああいった実践となって現れているのであります。我々はその足元にもおよばない。ですから一回一回シッカリと坐る！　只それだけであります。

「参禅の人しばらく半途にして始めて得」

平成十六年六月二十七日　合掌

仏法のおきてに任せて行じゆきて私曲を存することなかれ

『正法眼蔵随聞記』の中の一節であります。本書の中の一つの大きな特徴は、私ということを止めよ！　と言う教えであります道元禅師の学道用心の根本は、私事を止めろ！　自分のチッポケな計らいを全部投げ出しちゃえ！　こういうお示しであります。人間はたいてい自分中心にものを考え、行動をしております。ところがそれが間違いのもとになることが多い。大きなものの力、大きなものの計らい、それを知らずに自分の至らん頭で考えたことによって、それが正しい、それでいいんだと思ってしまう。あにはからんや、とんでもない間違いのことが多いんです。人間の間違えというのは大体そこから出てくる。そこへいくと天地宇宙万物の教えている真実の有り様、真理、或いはそれを発見された釈尊の教えである仏法の掟！　こういうものは間違いがない！　ですから自分の計らいを止めて「**仏法のおきて**」に従って行じなさい！　それが学道用心の根本である、というお示しであります。「**私曲を存することなかれ**」、私のおもむき、私的な心を止めてしまいなさい！　こういうお言葉であります。そうしないと本物は得られない！　真実の行にはならない！　というのであります。実はこのお言葉はあの有名な、「**学道の人はただ仏法のために仏法を学すべきなり**」凄いお言葉ですねー　毛筋ほどの自分というものを持ち込んではいけない！　ただ仏法のために行う！　こういうことをおっしゃったのは「道元禅師」をおいていない！　坐禅をすればいいことがある、必ずいい報いがある、そういうことを毛筋ほども思うな！　結果を求めて何になる。いま真剣に行じているのが全てである。それこそ悟りである！　これが「道元禅師」の仏法の根幹であります。善果を望むな！　坐禅をすれば良い事があるだろう、何か良い事があるだろう、これはダメ、全部止めることです！　「**仏法のおきてに任せて行じゆきて私曲を存することなかれ**」

平成十六年七月二十五日　合掌

菩提心を拈来して発心するなり

『正法眼蔵』「発無上心」の巻の一節であります。仏道を身につける、或いは仏行を行う、仏教に参じる。みな発心というものがなければならない。いやしくも宗教というものを本当に身に付けようと思うには**道心・道念**、これを掻き立てていく発心というもの、或いは菩提心というもの、そういった切に求める心を不断に起して行かなければならない。それでは発心というものが何処から出て来るのか。道元禅師は、他所から持ってくるんじゃないんだ、自分が安閑としていて他所から与えられるとか、或いは何かの折節に時節因縁によって忽然と発心が沸き起こってくるとか、そんなものじゃない。時節因縁ということも大切でありますけど「**菩提心を拈来**」しなさい！と。

菩提心を取り出しなさいと言うんですね。私ども皆様方が心の奥底に持っていながら宝を持ち損ねている、その菩提心を自ら取り出しなさい！　決して他所から持って来ると考えてはいけない。因縁とは切っ掛けです。夢の中にも、夢を見ていると きでさえも切っ掛けになる。花が開くとき、花が散るとき、全て因縁時節の切っ掛けにならないものはない。暑いときは暑さ。暑いときはナニクソという気持ちになる。先日の三五、六度の暑さ。あの暑さの中でもここで熱心に坐禅をした人が沢山いる。暑さは耐えるものではない、暑さに飛び込んでいってしまう、自分が暑くなれば外の暑さに負けないんです。寒さとて同じ、自分も寒いものだと思ってしまえばかえって暖かいんです。うんと暑いことも、うんと寒いことも、立派な因縁になり得る。風の音でも、石が竹に当たる音でも、桃の花がパッと開く時でも、それを見聞して悟りを開いた方すらいる。それがただ縁になって花咲いたんだ！　これを発心、菩提心といいます。

道元禅師はおっしゃる。素晴らしい仏さんなんだ！　仏さんでいることに気がつかないでいる！　**仏道をなろうというは自己をなろうなり　自己をなろうというは自己を忘るるなり**であります。「**菩提心を拈来して発心するなり**」

平成十六年八月二十二日　合掌

時節すでにいたれば
―これ仏性の現前なり

『正法眼蔵』「仏性」の巻の一節であります。仏性は時節因縁ということをこの巻で道元禅師がおっしゃっています。「時節」は時、「因縁」とは、様々な機縁、条件、契機、そういった時にはじめて仏性というものが現れるのである。決して生まれながらにして仏性というものが私どもの身体に具っているのでは無い！　心臓とか肺であるとか内臓のように具わっているものでは無い！　そういう形のあるものでは無い！　血液のように流動的なものでも無い！　仏道の行を行う時仏性が具わるのである。それが現れるんだ！　これが「仏性」の巻の骨子であります。一般仏教の教えでは、誰でも仏性があるんだ。身体に具わっているんだということを教えております。それに対して道元禅師は大きな疑問を抱いた！　仏になり得る可能性としての仏性を持ちながら、何故修行を一所懸命しなければならないのか！　これが、道元禅師が中国へ渡ってまで真の仏法を求めた最大の理由であります。それでどう解決されたのか！　それは『正法眼蔵』のあらゆるところに答えが述べられている。禅師が若い時に著わした「弁道話」の一節「**この法は人々の分上ゆたかにそなわりといえども　いまだ修せざるにはあらわれず証せざるにはうることなし**」。この素晴らしいお言葉によって完璧に語られております。誰にでも素晴らしいものが確かに具わっておるんだ！　だが実践しなければダメ！　実践して「行」を行として行う時に素晴らしいものとなって現れる！　ただ私どもが一番気をつけなくてはいけないのは言葉であります。皆様方は耳から入って来る声であります。言葉は自分の行とは違う，ここであります！　この自分が、私が如何に行ずるか！　この一点にかかっているのであります！

「道元禅師」の仏法は只管打坐だ　本性妙證だ！といいますのは皆様方がお一人お一人自分の行として行えるかどうか！　これが道元禅の骨頂であります！「**時節すでにいたれば　これ仏性の現前なり**」

平成十六年九月二十六日　合掌

ただこれ 志 のありなしによるべし
身の在家出家にはかかわらじ

『正法眼蔵』「弁道話」の巻の一節であります。「弁道話」の巻は『正法眼蔵』の中に含まれておりますが、それは後で編集したからでありまして、道元禅師は『正法眼蔵』の中の一節として著したのではなく日本へご帰朝され、間もなく正伝の仏法を何とか日本に伝えたいという若き烈々たる気概に燃えて著された書物一巻が「弁道話」であります。ですから様々な初心者向きのお示しも沢山含まれております。その中で、坐禅を誰でも出来る素晴らしいものだということを根幹に据えて教えられているのでありますが、坐禅弁道とは一体出家だけのものであるか或いは在俗の男女もあまねく仏道に適うことが出来るのか否か！　こういう自問自答の質問を設け、ご自分でいみじくもお答えになっているのが「**仏祖憐みの余り広大の慈門を開き置けり**」、それに続いて「**ただこれ 志 のありなしによるべし身の在家出家にはかかわらじ**」、こういうお言葉で述べられているのであります。

志 とは、道心であり、道念であり、発心であり、やる気であり、そういうものを含めて一言で現わされているのであります。老若男女に一切関係なし、坐禅は 志 があるか否かである！　志 が堅固であれば誰でも仏道に適うことが出来るんだ！　こういう意味であります。そしてこの「弁道話」の後に、もっと坐禅を日本国中に普及させたいというお心で撰述されたのが『普勧坐禅儀』一巻であります。こういうことを考えますと、道元禅師の仏法の根幹は紛れもなく坐禅であります。

坐禅を一所懸命やっていれば、 志 を立てて坐禅をしていれば、正伝の仏法が行ぜられ受け継がれ維持されて行くんだ！　こういうお示しであります。そういったことは先輩の教えの通りに従って行いなさい。 志 とは、ただ一つ！　坐禅であります。坐禅を行ずる！　この固い 志 をますますお互いに堅固にして参りたい！　かように思うのであります。

「**ただこれ 志 のありなしによるべし身の在家出家にはかかわらじ**」

平成十六年十月二十四日　合掌

打坐(だざ)はすなわち正法眼蔵涅槃妙心(しょうぼうげんぞうねはんみょうしん)なり

『永平廣録』巻四の一節であります。『永平廣録』という書物は道元禅師の漢文の語録であります。十巻の中の巻四にこのお言葉が述べられております。ここでいう「正法眼蔵」というのは正伝の仏法そのものの精髄！　いわばエッセンスというものが「涅槃妙心」である、お悟りそのものに他ならない。こういう意味であります。ですから正伝の仏法、釈尊からズーット代々受け継がれ正しく伝えられて来た仏法そのもの！　その中核は何かと言えばお悟りの心でありますが、それが只管打坐である！　こういう意味であります。釈尊から二千五百年を隔てております。その間、正しいマスターから弟子へというふうにして、代々釈尊のお悟りの心というものが受け継がれて来た。これを最も大切にするのが禅門であります。経典、祖録も大切であるけれども、それは所詮文字(もんじ)に書かれた言葉である。その言葉をいくら見ても限界がある！　仏法というものは実践。実践をするところに、初めて釈尊のお悟りの心というものがわれわれの身体を通じ心身を通じて、ここにいま現れ出すのである！　これは他ならない「**正法眼蔵涅槃妙心**」という素晴らしい境地になるんだ！　こう言う教えであります。何も気根の優れている人、或いは毎日毎日坐禅に没頭しているような大熟練者、或いは特別の坐禅道場で長く参禅をしている人、そんなような人だけの専売特許では決してない！　誰でも発心し真面目に一所懸命坐る当座に「**正法眼蔵涅槃妙心**」が具わるんだ！　これが只管打坐の正体である！　これが道元禅師のお示しであります。只、発菩提心の発露！　それがありさえすれば「**正法眼蔵涅槃妙心**」である！　古仏たちもみな何十年という只管打坐によって道を明(あき)らめたくらい大変なことであります。皆様方は毎日坐禅に打ち込んではいられない。他の仕事、生活、そういったものの合間にしか坐れない！　ならばせめて一時坐る間は最大フルに坐禅に没頭する！　打込む！こういうことでなければならないのであります。「**打坐(だざ)はすなわち正法眼蔵涅槃妙心(しょうぼうげんぞうねはんみょうしん)なり**」

平成十六年十一月二十八日　合掌

人人皆仏法の器（にんにんみなぶっぽうのうつわ）なり

『正法眼蔵随聞記』の中の一節であります。人人は人々、誰でも彼でも仏法の器である。老若男女全く平等であるということであります。これは仏法の上で平等、皆誰しも同じ様に仏性というものを働かせることが出来るのである、という意味で平等だといわれるのであります。仏教一般では仏性、仏様の本性は誰でも持っている、こう教えております。ところが道元禅師はそういうふうにはおっしゃらない。仏性は仏教的な行（ぎょう）を行うとき初めて現れ出してくる。これが仏性である！　こういうお示しであります。だから仏教的な行いをしない時には仏性は隠れちゃっている。仏教的な努力！　坐禅、読経、その他諸々（もろもろ）の仏教的な行がたくさんあります。そういうことを行うとき内に秘めている宝石が光り出す、光り出してくる。普段のわがままな自我、自己、そういうものがつまらんものであるということが解ってくる。

「松影の暗きは月の光かな」という句がございます。松の影が暗く映るのは、月の光があって初めて黒々として映るんだ！　月の光というものは秘めていた仏性が輝き出した自分の中にある宝石の光であります。それが光だしますと、己の至らなさや、愚かさ、小さいつまらない己、そういったものがハッキリ・クッキリと解ってくる。逆に光が失われてしまうと、つまらない自己、わがままな己、そういったものが働き出すということになります。

坐禅はいうまでもなく、この仏性が現れだす働きであります。それには頭を使わないこと、頭を働かせないことであります。自分、自我そういった頭の働きをしないこと！　これに尽きます。一時（いっとき）でも、いや出来るだけ頭の働きをしない！　身体の働きの坐禅！　これをおこなう。成道会といったって取っておきの坐禅があるわけじゃない。よそ行きの坐禅をすることはない、只それだけ。頭の働かない坐禅！　それが本物であります。お互いにそういった坐禅にしなければならないのであります。

「人人皆仏法の器（にんにんみなぶっぽうのうつわ）なり」

平成十六年十二月五日「成道会」　合掌

学道の人　後日を待ちて
行道せんと思ふ事なかれ

『正法眼蔵随聞記』の中の一節であります。「学道」とは仏道を学ぶ者、そういう人は「**後日を待ちて行道せんと思ふ事なかれ**」。明日がある明後日がある来年がある。こういう思いで行というものをしてはいけない！　このような意味であります。

日本人は「たら」という言葉が好きである。何々になったらば、何時になったら、来年になったら、お金が貯まったら、健康になったら、こういうたらが大好きですが、たらの保証は無いのであります。あるのは今・現在・此処ということだけであります。今・現在・此処で共に坐っている現実！　これ以外に真実なものは無い。真実そのものである。今ここに坐っている我！　これを継続していくことであります。これが「学道」の根本でなければならないのであります。明日の保証の無い、まして来年の保証も無い、こういう真剣勝負の場！　これが「学道」であります。

祖師も先輩も皆そういう真剣勝負の場に生きて来られた。私共も祖師を慕い、行を如実に行じなければならない！　これが「行道」というものであります。何も思わず只坐る！　雑念、妄想が浮かんでまいります。絶えることなく浮かんでくる、容赦なく浮かんでまいります。それを容赦なく断ち切ればいいのであります。雑念を如何に断ち切るか！　はじめは上手くいきません。しかし訓練によって長く雑念に捉われないでいられるようになります。

ベテランの方はむしろ心掛けなければならない、慣習で坐る、惰性で坐っている。これは雑念よりもっと悪い。初心に帰れといわれております。初心に帰るのではない。常に初心です！　一時一時が新しい時です。古参の人も初心の人も共に同じ行を行ずる。これが「学道」の在り方でなくてはならない。

光陰矢のごとく過ぎます。今日という今、今という今は、この一時しか無い！　“尊ぶべき身命”であります。

「学道の人後日を待ちて行道せんと思ふ事なかれ」

平成十六年十二月二十六日　合掌